

目次

- | | |
|---------------------------|--------------------|
| P1 巻頭言 (中川統夫副会長) | P8 エッセイ (三輪公忠名誉会長) |
| P2~P5 国際理解講演会「アフリカの現在と未来」 | P9 キムチと韓国の伝統料理 |
| P6 アルゼンチンのクリスマス料理 | P10 事務局便り |
| P7 新年懇親会 | |

私の25年間のユネスコ活動を振り返る

港ユネスコ協会副会長 中川統夫



次回のブレティンの巻頭言をお願いします、と水野事務局長から伝えられ、一瞬戸惑っていると、続けて順番ですからと言われ、反射的に分かりましたと返答してしまいました。

港ユネスコ協会の巻頭言といえ長年、三輪公忠前会長の格調高い且つ歯切れの良い文体で、政治問題や文化論を国際的な視点から論じる場としての位置付けが定着していました。テーマはアカデミックなものが多く、私の基本的な知識のレベルでは若干難解な部分がある一方、高い見識、視点からの意見や知識は新鮮な驚きを持って様々な事象への理解や認識を深める機会となり、港ユネスコ協会の一員として得ることが出来る貴重な財産のひとつでした。昨年名誉会長に勇退されるまでの長年巻頭言を担当されてきた功績に改めて心より敬意を表したいと思います。

私が港ユネスコ協会に入会したのは1986年。当時活動していた東京青年会議所の先輩の紹介がきっかけでした。事務局は廃校になり取壊し前の旧愛宕中学校の一室にあり、夜間は人気ほとんど無いこともあり、古い校舎は寂しく暗い雰囲気イメージでした。

入会后すぐに常任理事を拝命し、新年会や会員間の交流を担当させて頂きましたが、当時はまだ青年会議所の現役メンバーでもあり、時間的な余裕が無くユネスコ活動はほとんど出来ていなかったと思います。

1988年、急遽勤務していた不動産会社を辞め家業を継ぎました。その直後父が他界しましたので相続や事業の承継に追われ、それから2年後のバブル崩壊後の様々な処理も重なり約10年位は港ユネスコ協会の常任理事としての役割の半分も出来なかったのではないかと考えています。

本年10月17日は港ユネスコ協会が創立されて30年目にあたります。昨年末より30周年記念事業委員会を中心に様々なイベントが企画されつつあります。高井新会長は港ユネスコ協会の創立メンバーであり当協会の30年間の全ての活動を体験しよく理解しておられ、それ故この30周年事業へ大変積極的に取り組んでおられます。会員及び関係者の方々の協力を得、是非この事業が成功裏に終わる事を願っています。

最後に尊敬する森信三先生の「心魂にひびく言葉」の中からその一部をご紹介します。森信三先生は戦前・戦後を通じて、日本の教育界最大の人物であるともいわれています。常に実践を重んじ、実践から得た真理のみからその思想体系(全一学)を作り上げました。定年後、1年の半数以上を全国への講演行脚に費やし、膨大な著書を執筆しました。真の教育者とはこういう方ではないでしょうか。

* 「人生二度なし。これを自覚するかどうかで人生は全く違う」 (8ページ下へ続く)

「アフリカの現在と未来 ～ジャーナリストの視点から～」

日時 2010年11月17日（水）午後6時30分～8時30分 会場 港区立生涯学習センター305号室

講師 ジャーナリスト **松本 仁一 氏**（元朝日新聞編集委員）

南アフリカ共和国でサッカーワールドカップが開催された今年（2010年）、世界中でアフリカへの関心が高まりました。この機に「遠くてよくわからないアフリカをもっと知りたい」という要望が多くよせられ、今回、ジャーナリスト松本仁一氏を講師にお迎えして、講演していただくことになりました。小雨の降る寒い日でしたが、港区民、会員、一般から、いつも講演を楽しみに参加して下さる方々、アフリカに関心の深い老若の方々、元外交官の方など多数参加して下さり、熱のこもった講演会となりました。

講師プロフィール



東大法学部卒業後朝日新聞社に入社。30年の記者歴の中、ナイロビ支局長、中東アフリカ局長(カイロ)を歴任。03年から編集委員、2008年退社後は、フリージャーナリストとして活躍中。

中東報道でボーン上田国際記者賞、「アフリカで寝る」で日本エッセイストクラブ賞、「テロリストの軌跡」で日本新聞協会賞、「カラシニコフ」で日本記者クラブ賞などを受賞。

著書に、「アフリカ・レポート」(08年岩波新書)、「カラシニコフ」(08年朝日文庫)、「アフリカを食べる・アフリカで寝る」(2008年朝日文庫)、「ユダヤ人とパレスチナ人」(95年朝日新聞社)、「アパルトヘイトの白人たち」(89年ずさわ書店)、「テロリストの軌跡」(共著、草思社)など。

講演内容

1. アフリカの様子がおかしい。

いわゆるサハラ以南アフリカには48の国があるが、そのどの国も同じ病理を抱えている。50年ほど前の1960年代に、西欧の植民地支配から独立し、豊かな資源をもとに、希望に満ちた将来に歩み出したはずだった。

しかし冷戦構造というベールがはがれ、ようやくアフリカの現実が見えてきたのだが、それは、腐敗した指導者が国を食い物にし、そのため国家崩壊が始まっている姿だった。今も、多くの国々では政府指導者が腐敗し、そのため国民が犠牲になり、大陸の多くの国がますます貧困となり、国民同士の殺し合いが激化している。

その状態を、「ジンバブエ」と「シエラレオネ」という二つの国のケースで見てみよう。

(1) ジンバブエ (旧ローデシア)

1980年に独立した人口1300万人の南部アフリカの内陸国。新政府が誕生したとき「アフリカで最も恵まれた独立」といわれた。農業基盤は完全に近く、白人大規模農場も黒人小農も高い生産力を持ち、農産物は需要を満たして余裕があり、その余剰農産物は近隣国に輸出されて外貨収入の3分の1を稼ぎ出した。大規模工業都市があり、労働力の質は高い。鉱物資源は豊富で、鉱業施設も完備し、鉄道の運行技術は高く、自動車道路も充実していた。25億ドルの外貨収入のある豊かな国であった。

それが今――。

農業生産は需要の半分にも満たず、国内に飢えが広がり、2008年2月にはインフレ率が年16万%を越えた。人びとは苦しさに耐えかね、働き盛りの男性300万人、つまり総人口の4分の1が近隣国に脱出しているといわれる。国は壊れつつある。

何故こういうことになったのだろうか―

独立闘争の指導者だった現大統領ムガベは、独立当時から10年、次第に腐敗した。国際空港の新築に関してフランスの会社から300万ドルの賄賂を受けたとの新聞報道があって、クーデター騒ぎが起きた。大統領はクーデターを抑えるために、議会に諮らず独断で、軍に影響を持つ元ゲリラ7万人に対する年金支給を決めた。一時金5000ドル、年金月500ドル。予算措置なき財政支出で、国家財政は破綻した。

若い女性と再婚したが、その妻はすさまじい浪費癖があった。彼女の機嫌をとるため、香港で豪邸を建てたり、コンゴのダイヤモンド鉱山を買い与えた。コンゴ内戦の際には、その鉱山を守るために、ジンバブエの軍隊2個師団をコンゴに派遣、外貨の莫大な支出を行った。このような愚かな政策で、国が崩壊、ひどい経済状態に陥った。

こうした状態に対する国民の不满をそらすため、ムガベ大統領は、元ゲリラたちに白人農場を占拠させた。しかし元ゲリラたちは広大な農場を管理するノウハウを持たず、大農場は荒廃、農業生産が激減し、外貨収入を失った。その結果、驚異的なインフレが始まったのである。

物々交換できる人はともかく、給与生活者の生活は崩壊した。生活できない人々は、近隣国の南アフリカ共和国やザンビアへ逃げ、医者・薬剤師などはロンドンへ移住し、給与生活者である学校の先生などは、悲惨な生活を余儀なくされている。

(2) シェラレオネ

西アフリカ西部、大西洋岸に位置する共和制国家。1808年にイギリスの植民地となり、1961年に独立した。原住民が住んでいた地域に、イギリスが解放奴隷を運んで国をつくらせた。解放奴隷は文明に触れているが、原住民は触れていない。この文明格差のため、たちまちのうちに、黒人が黒人を支配する関係が出来てしまった。

1960年代に ダイヤモンドの鉱脈が見つかった。大統領は、年間20億ドルのダイヤ収入を自分の親族で独占し、国づくりのためのインフラ整備は放置した。これに対して反政府活動が始まった。しかし反政府側もねらいはダイヤ利権の支配だった。道路・電気・下水はそのまま。内戦が続く状態の中で農地に種も播けない。生活できない人々が、港町で強盗を繰り返す。折角ダイヤがあるのに、その収益は国づくりに使われていない。

反政府軍は住民にきらわれ、兵隊が不足する。そのためゲリラは学校の前で子どもたちを捕まえ、少年兵にする。

南に隣接するリベリアは、アメリカが解放奴隷を送り込んでつくった国だが、このリベリアの大統領は隣国シェラレオネのゲリラ勢力に武器を密輸し、ダイヤを手に入れさせた。その結果、リベリアはダイヤ鉱山を持たない国でありながら、ダイヤの輸出国であるという珍現象が起きてしまった。



わがもの顔で町を歩く少年兵（リベリア）

以上、国家が崩壊した2つの例である。が、その他、赤道ギニアのように、石油で年間100億ドルもの国民総生産がありながらそのほとんどが指導者の個人口座に振り込まれ、国民は飢えに苦しんでいる国もある。コンゴにおける大臣クラスの武器汚職の実情、ナイジェリアの治安状況等々、外交を含めて 国家の体をなしていない状況を具体的事実を挙げてみたが、アフリカでは 20カ国ぐらいが破綻し、または破綻に向かっている。

2. なぜ国家が崩壊したのか。国家とは何だろう。

冷戦構造下では、それぞれの国をソ連とアメリカが支援していたため、大統領が無能でも、目立たなかった。

コンゴ（旧ザイール）にモブツという腐敗独裁大統領が存在しえたのは、アメリカが支えたからだった。ジンバブエは旧ソ連が支えた。つまり、国家ともいえぬ国家が、米ソの支えで生き延びてしまったのである。

しかし、冷戦構造が崩れ 米ソの支えがなくなったとたん、国家の崩壊が始まり、人びとが生活できない国になってしまった。

サハラ以南アフリカの48か国のほとんどは、ひとつの大陸にあって地続きである。植民地時代には地理や自然、住民の構成に関係なく宗主国の力関係で国境線が引かれた。住民にとって伝統的によりどころとし、帰属感を持っているのは部族共同体である。が、それが無視された。ひとつの国としてまとめるのが不自然である多部族国家が数多くできてしまった。

たとえば スーダン。イギリスが独立させるときにアラブ人地域と黒人地域をひとつにしてしまった。支配層は北部に住むアラブ人。石油は黒人居住地である南部から出た。利益は北のアラブ人に吸い取られ、南の石油埋蔵地帯には、いまだに空港もなく、道路は舗装されず、雨がふったら機能が停止しまうようなひどい状況である。そういうところで中国人の労働者が石油を掘っている。

ルワンダでは、94年の部族対立から100万人が虐殺される事件が起きた。

コンゴ民主共和国 (旧ザイール) には、部族が多く、言語は300もある。ベルギーがそのままの形で独立させてしまった。首都から遠い地域に住む国民は、首都がどこにあるのか、誰が大統領かさえも関心がない。

このように、アフリカの多くの国が今、独立の意義を失っている。治安が守られないだけでなく、兵士や警官、教師など国の基本となる公務員の給料さえ遅配・欠配が続く。その結果、国つくりの中核となるべき中産階級や、教育を受けた医師や法律家などの専門家までが国外に流出している。まさに国家が崩壊しているのである。

テレビを見ていると、アフリカの様々な動物やきれいな景色に接することができるが、私たちはアフリカの人々がどう暮らしているかを知るべきである。

3、アフリカの国家崩壊は、日本に無縁ではない。

新宿・歌舞伎町の外人バーの200軒ほどは、ナイジェリア人が経営している。

彼らは国内では生活できず、最初、旧宗主国である英国のロンドンに出ていく。しかしもはやナイジェリア人口は飽和状態だ。続いて、南アフリカに標的を変えるが、ここも同様だ。そこで日本があらたな目的地になった。

最初は、六本木などで客引きの仕事をし、金をためて新宿に外人バーを出している。ガーナ、スーダン等々からも日本に来ている。歌舞伎町で危ない商売をしているアフリカ人はほとんどが大卒である。本国が崩壊国家となり、生活していけないからそうやって出稼ぎに出てくる。だから取り締まっても無意味である。

アフリカの国々の崩壊が、歌舞伎町の治安悪化など、われわれの生活にもろに影響を与えているのだ。

日本の明治維新では、国家の形成を視野においた指導者が現れた。彼らは国が植民地にならないためにはどうすべきかを懸命に考えた。そのために軍備、経済、教育を充実させ、社会を近代化させようとした。明治12年には全国に学校を作っている。教育は成果が出るのは遠い先のことだが、そこに大きな投資を行ったことは、すごいことであったといえる。

第二次世界大戦後、日本が復興したのは「張り合いがある社会」であったからである。8時間働けば家族を養える、頑張れば家族で温泉へ行ける、という「張り合いを持てる状態」を国家が保証したから、みんなが一生懸命に働いた。それが国づくりにつながった。今、ほとんどのアフリカにはそれが無い。



かといって、われわれがそうしたアフリカ国家に対し、「やり方を変えろ」「それは間違っている」とはいえない。国家形成の遅れている国に対してであっても、「国家」に干渉することはできない。しかし、国や政府にはかかわれないが、民間の社会には絡んでいくことができる。実際、それらアフリカの国々の人々にやる気を起こし、張り合いを持ってもらうようにと頑張っている日本のNGO組織や民間企業が存在している。働くことの本質を教え、現地の発展に寄与している日本人、日本企業の例をあげると、

- ① モザンビークで、現地アルミの精錬会社の電力需要に応え、5000人の労働者をきちんと教育した日本企業。
- ② ケニアのナイロビで、マカダミアナッツチョコレート製造販売で成功をおさめている「ケニアナッツ」社の佐藤社長。
- ③ ウガンダで衣料メーカー「フェニックス」社を興し成功している柏田社長。
- ④ セネガルでは、オイスターの養殖技術教育にあたって、意欲を育てる活動を行った青年海外協力隊員の七尾氏。観光客相手の商売を構築して、漁業組合をつくり、保冷車を用意、利益があがるようになるまで育て、



NGOの指導で野菜を育てる人々（ジンバブエ）

現地の人々が本気で漁業に取り組むようになった。協力隊が手を引いた後も 漁業組合は機能している。

- ⑤ 他にも、地元の人々がNGOをつくり、子供服を作って収益を上げて教師の給料を支払うなど、政府に頼らず、自分たちの生活を自らの努力で変えていこうという新しい動きも出てきている。私たちはそうした活動を支えることはできる。

4、質疑応答

Q アフリカに日本人は1000人もいない。中国人は100万人といわれているが、どうか。

A 1980年にアフリカ在住の中国人は1万人。しかし、今、80万とも100万ともいわれている。中国政府のプロジェクトのためや、個人ベースで商売のために滞在している。そうした個人は、中国から安い製品を大量に仕入れ、現地で売っている。今では安い衣料の分野、雑貨や靴の分野、それらの中級品、下級品のマーケットは中国人が完全に掌握している。そのため、現地の小規模ビジネスはほとんど駆逐されてしまった。

中国企業はアフリカの政府首脳に、家や車など直接に利権を与えることもしている。日本はアフリカとはODAベースの関係が中心だから、「賄賂ビジネス」では勝負にならない。中国がアフリカにどんどん進出しているのは事実であり、これから10年で、アフリカの経済は全部中国に掌握されるだろう。なにしろ、中国では2億の人が職にあぶれているので、アフリカでもどこでも行く。しかし、長い目でみたら中国のやり方ではいけないと思う。

Q ユニセフの活動をどう思うか。飢えている子どもの支援になっているのだろうか。

A ユニセフは現地の事情を分かっているスタッフがおおく、いい仕事をしている。たとえば学校建設。学校の周りに村ができる。学校中心にいいコミュニティーができていく。ユニセフの金は政府にいかない。

Q 日本の青年海外協力隊員等は、治安悪化で仕方なしに引揚げたのか。

A アフリカ諸国の治安が悪化しているのは事実だ。私自身、ケニアのナイロビに4年間駐在した間、12回も強盗に入られた。南アフリカ駐在の特派員の多くは、家に強盗に入られた経験を持つ。共同通信は南アからの引揚げを決断したという。家族を置いての出張が多いためこういう情勢ではやむを得ない。

ジンバブエからは青年海外協力隊員が引き揚げ、ラゴスでは、商社を中心に引揚げている。

機器の接合不具合により、講師が持参された写真の投影がかなわず残念でしたが、アフリカの現状を、そこに至った理由、国とは何か、何をどこからどうしていくべきか、を含めて、判り易い言葉を使って、貴重なご示唆をいただいた講演会でした。

(国際理解講座委員会 山田摂子/高井光子)

アルゼンチンのクリスマス料理

日時：2010年11月27日（土）12：00～15：30

会場：港区立男女平等参画センター4階 料理室

講師：七草木アウロラ（料理実習） 城間アドリアン（食のお話し）

今回の世界の味文化紹介は、日系3世のアルゼンチン人ご夫妻を講師に迎えて開催しました。



最初に、スペイン語講師であるご主人のアドリアンさんに、お二人の馴れ初めを含めたアルゼンチンの文化について簡単に話していただきました。

40年前、アドリアンさんのお祖父様が沖縄から、アウロラさんのお祖父様が福島から、どちらも横浜経由の船でアルゼンチンに渡りました。そして20年ほど前、彼らの孫にあたるアドリアンさん、アウロラさんが別々に日本に出稼ぎに来ました。日本で出会い、当時スペイン語を話す人が周りにいなかったこともあり、二人は母国語で意気投合したとのことでした。

アドリアンさんはとても明るい方で、ルールがなく、時間通りに事が進まないアルゼンチンの文化を面白おかしく話して下さいました。地図ではちょうど日本と真反対の位置にあり、こちらが昼の12時10分なら、あちらは夜の12時10分。こちらが冬に向かっていながら、あちらは夏に向かっていっているという具合にすべてが逆の遠い国アルゼンチン。日本に来た当初は、どうして日本人はこんなに働くのかな？と不思議だったそうですが、8年前にアルゼンチンに帰国した時は、逆にいらいらすることが多かったとのことでした。

奥様のアウロラさんは料理のプロであり、今日の実習のメニューは家庭料理というよりはレストランで食べる料理。ご主人もとても高く評価し、いつも楽しみにしていると教えて下さいました。



お話の後、南米料理教室主宰のアウロラさんの料理実習に入りました。メニューは、ツナ入りまるごとトマトの前菜、パルミタ（ヤシの芯）・生ハム・パイナップルのアルゼンチン風サラダ、ローストポークの白ワイン蒸（プルーン風味）、いちごゼリーの生クリーム添え。

アウロラさんは淑やかで静かな女性ですが、的確な説明で、実習はとてもスムーズに進みました。出来上がりも豪華で美味でした。アルゼンチンでは、牛肉よりも豚肉の方が貴重で高価だそうです。ローストポークはメイン料理に相応しく、前菜、サラダ、デザートも夏のクリスマスを感じさせる色と味でした。



出来上がった料理を前にして参加者全員がシードルで乾杯。
FELIZ NAVIDAD（メリー・クリスマス!!）

料理実習では後方から見守っていた夫のアドリアンさん。準備、実習、片付と時間通りにテキパキと進む様子を、「マシンみたいだ。」と感心されていました。両国の文化の違いを認識しつつ、アドリアンさんが米沢牛より旨いとおっしゃる、アルゼンチンの牛肉を一度食べに行ってみたいものです。

（世界の料理委員会 金澤由里）

新年懇親会

日時：2011年1月16日（日）12時～15時
会場：土佐料理「ねぼけ」 新宿野村ビル50階

「新年明けましておめでとうございます」と高井会長の挨拶から始まった新年会には、会員34名の方々が参加してくださいました。快晴の都心を一望できる新宿野村ビル50階の「ねぼけ」で新年懇談会が和やかに開催されました。会長からは「われらが港ユネスコ協会は1981年10月に設立され、今年で満30年目になります。これまで、国際都市・港区の地域に根ざした、時代より一歩先駆ける活動を心がけながら、多種多様な形で続けていくことができました。今年は30周年記念事業を計画、実現するために、会員の皆様のさらなるご尽力、ご協力をお願いしたいと思います。」との挨拶が述べられました。



宴会は12時15分過ぎにスタートし、松本副会長に乾杯の発声をいただき、会食、歓談となりました。

高い天井と太い梁の民家風の趣のある部屋、昔を思い出す掘りごたつのテーブルで、土佐の郷土料理、鰹のたたきなどをとても美味しく頂きました。

その後、三輪名誉会長をトップバッターに約1時間、全員が自己紹介を行いました。

引き続き、恒例のお楽しみ抽選会が始まりました。最高齢者の原口さんに一等賞が当たり、ご本人もお喜びでしたが、全員からも大拍手が湧き起りました。私も1人で「納得、納得」とうなずいていました。

閉会までの20分余りは、席を移動したりして、ともども親しげに会話を楽しんでおられる風景は和やかで、あたたかい良い雰囲気が漂っていました。

閉会の挨拶を中川副会長からいただき、勢いよく心を合わせて「一本締め」を行いました。

集まりの締めくくりは、全員で、「ねぼけ」店前の展望ロビーの酒樽をバックに集合写真を撮って閉会となりました。

参加者の顔の表情はどなたもとても良いなあ、これは楽しく交流している幸せな証でないかと感じました。私個人としても、「人の中に出て、今日も何か得ることがあった。」と感じることができた一日でした。

冬将軍が日本列島に居座り続ける寒い日に、ご出席くださいました皆様に、当委員会企画担当者一同より、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。（会員開発委員会 副委員長 井ロフミ子）



アジアカップをもたらした選手と監督は

第二の敗戦の沈鬱を吹っ飛ばした

名誉会長 三輪公忠



暗い世相である。菅総理は第三の開国である、という。幕末開国、1945年の敗戦後の「開国」、そして今。自由貿易の徹底である。しかし日本の知的空間にはフランスの人気人類学者のエマニュエル・トッド氏の唱える、自由貿易は民主主義の崩壊をもたらすという警鐘が鳴り渡っている。一国が特化した産物で貿易をすれば、相互に恩恵がある。労働者の賃金は上昇する。相互に経済的繁栄がある。

しかし今日はまったく様変わりした状況下にある。いわゆる BRICs(ロシアは除くとしても)の経済発展は先進工業化社会の労働者から仕事をうばってしまった。といっても、それぞれの国が貧者だけになっただけではない。それどころか貧富の差が拡大し続けている。この状況が民主主義を崩壊させるというのだ。

第三の開国のイメージはそんな意味で暗い。現状の実感は第二の敗戦ではないか。そこに飛びこんできたドーハの勝利、サムライブルーの優勝、アジアカップの奪取である。その時の感激、暗雲は一瞬にして飛び去り、晴天に日章旗がひるがえっている。その高揚感、第一の敗戦(1945年)で意気消沈していた日本国民を奮い立たせる感動を与えたロスアンジェルスからのニュースであった。全米水泳選手権大会で世界新記録をだして優勝した古橋選手と同僚の橋爪選手の快挙であった。敗れたアメリカが「フジヤマの飛び魚」の偉名を奉った。

対豪州戦での李忠成選手のシュート、GKの川島永嗣の神業を身震いして観戦した。勝利の後で、ザッケロニ監督は日本人選手たちの団結力とひるまぬ攻撃精神を褒めちぎり、選手らは監督のきめ細かい気使いと優れた采配を褒め称えていた。組織、団結、リーダーシップの模範答案であった。

日本の政治に携わるオジサンたちも何かを学んでくれたらうか。(2011・1・31)



(1 ページからの続き)

- * 「幸福とは求めるものでなく、与えられるもの。自己のなすべきことをした人に対し、天からこの世で与えられるもの」
- * 「人間は一生のうちに逢うべき人には必ず逢える。しかも一瞬早すぎず、一瞬遅すぎず」
- * 「たった一枚の手紙で、たった一言の言葉で、人を慰めたり励ましたりできるとしたら、これほど意義のあることはない」
- * 「人間の悩みは比較から生じる」
- * 「物事は 80 点でいいから期限を守ること。これが世に処する要諦である」
- * 「一日は一生の縮図である。これを悟って肅然たる思いに到るとき、人生の真実の一端に触れる」
- * 「真理は感動を通じてのみ授受できる。だが、それは教える者自身が生きた真理についての感動がないとできない」

などなど、励まされる言葉が多いと思います。因みに先生の代表作は修身教授録です。

『修身教授録』は、戦前、天王寺師範学校で行われた森信三先生による「修身科」の講義録であり、発売から約 20 年を経た現在も版を重ねるロングセラーであります。教育界のみならず、スポーツ界や経済界のリーダーにも愛読者は多くいるようです。

(2011・3.1)

「キムチと韓国の伝統料理」

日時：2011年2月26日(土)12:00～16:00 会場：港区立男女平等参画センター4階料理室

講師： ^{やなぎ}柳 ^{ヒョンミ}賢美さん（会員） と ^{キム ユヒ}金 有希さん



近すぎてかえって遠い国だった韓国の味文化紹介です。講師は港ユネスコ協会会員で「世界の料理委員会」メンバーの^{やなぎ}柳 ^{ヒョンミ}賢美さんと、現在日本の大学に留学中で^{やなぎ}柳さんの^{キム}姪御さんの^{キム}有希さんです。柳さんは日本には20年近く住んでおられ、流暢な日本語を話されます。

最初にキムチについてのお話がありました。11月末～1月は韓国ではキムチ作りがさかんに行われますが、キムチは三国時代（4世紀～7世紀）にはすでにあつたとのこと。しかしその頃はまだ唐辛子は使われなかったそうです。

そもそも唐辛子は豊臣秀吉の時代に日本から輸入されたが、すぐには食用にはならなかったようです。19世紀後半になって食用になり始め、キムチにも使われるようになったということですから案外新しいのです。

キムチの味はバラエティがあり、地方や季節、そして家庭ごとに違った味があります。発酵食品、しかも低カロリーですから健康食品としても注目されるようです。そして今回のキムチは柳さんの出身地である全羅道の味つけで、塩辛を使った濃い味でした。



「キムチ」：韓国直送の唐辛子が決め手でしょうか。煮干し・昆布だしとともにイロシエキス、カナリエキス（いかなごエキス）、網の塩辛そして大根、にら、ねぎ、せり、生姜、りんご、梨、たまねぎなど、たくさんの食材が味を豊かにしています。こうしてできたキムチソースで白菜1枚1枚にお化粧します。

「ボッサム」（白菜や大根などの野菜キムチソース付きゆで豚）：肉は皮つき三枚肉。ソースには生牡蠣も入っています。肉は味噌や生姜やネギと煮込むことによつてくさみがとれます。なかなか豪華です。

「パジョン」（ニラチヂミ）：チヂミ粉は韓国料理食材店から購入しました。たくさんのニラを使います。青唐辛子を使ってさらにおいしくなります。

「ケランチム」（韓国風茶碗蒸し）：アミの塩辛やゴマ油を少し加えて風味豊かに、しかも電子レンジでできる簡単で美味しいレシピです。

「スチョンガ」（韓国伝統茶）：お茶というよりはデザートで、柿のパンチ。ニッキと生姜をひたすら煮て、その後干し柿をいれます。甘みはニッキからで十分。シナモンスティックしか知らなかったのが大きなニッキを見てびっくりしました。



料理のベテランが多い参加者の皆さんにも初めての食材もあるなど、手ごたえがあつたと思います。5品を作るという忙しいメニューでしたが試食の時間もなんとか予定通りすませ、出来たてのキムチをお土産にしました。

^{やなぎ}柳さん、^{キム}金さん、有難うございました。

（世界の料理委員会 松崎加寿子）





事務局便り



【今後の行事予定】（詳細は別途チラシやホームページでご案内いたします）

- ☆ 4月27日(水)18:30-19:30 MUA 年次総会 (生涯学習センター 305 号室)
- ☆ 5月19日(木)18:30-20:30 新入会員を囲む会 (生涯学習センター 305 号室)
- ☆ 5月24日(火)18:00-「モンゴル紹介の夕べ・モンゴル中学生との交流」(生涯学習センター)

【ご寄付およびご寄贈品ありがとうございました】

☆新年懇親会に 清水軍治副会長からビール券 4,480 円分 (2011.01.16)。

☆「ミンダナオ子ども図書館」支援として

- *国際シンポジウム「変貌する家族」会場での募金 22,400 円 (2011.01.18)。
- *王勲渝様 (台北市在住) から 15,000 円 (2011.02.22)。
- *川島嘉子様から 10,000 円、高井光子様から 5,000 円、友金守様から 2,000 円。
- *会員および一般の方から沢山の品物 (夏物衣類、バスタオル、スニーカー、リックサックなど) (非会員) 坂田真理子様、佐々木裕子様、柴田ひさ様、(会員) 磯部豊子様、奥村和子様、佐藤康子様、高井光子様、深川忍様、水野隆様、渡部俊子様
なお、ご寄贈いただいた品物は2月初めに現地に発送しました。
随時、ご寄付・ご寄贈品をお受けいたしております。ご協力お願いいたします。



☆ユネスコ世界寺子屋運動支援として

- *都立三田高校ユネスコ委員会 (担当藤村由夏先生) から「書き損じはがき」543 枚 (2011.02.18)。(これは日ユ協連へ届けました。)

港ユネスコ協会事務局 (火～金 10:30～17:30)

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 FAX 03(3434)2233

電子メール : minato-unesco@nifty.com ウェブサイト : <http://minato-unesco.jp/>

■ 編 | 集 | 後 | 記 ■

- ◆3月になり、春はもう間近ですが、こう寒暖の差が激しいと体が参ってしまいますね。花粉も本格的に飛散し始めたこの季節、栄養と休養は十分に取って、元気に春を迎えましょう！(島田和美)
- ◆今年度初め頃から広報ブレイク・インターネット委員会の一員に加えていただいたばかりとの感じでしたが、光陰何とやらで、もう年度末。少しはお役に立てたのだろうか、訝るばかりです。季節はまさに三寒四温。体調管理にも気を配り、新年度にも出来ることを着実に、の原則で臨みたいと考えています。(須田康司)
- ◆先日、渋谷の小さな映画館で、ずっと気になっていた「レイチェル・カーソンの感性の森」を見てきた。1962年に「沈黙の春」を著し、世界で初めて化学物質の危険性に警告を発した生物学者を、ベテラン女優が一人芝居で好演していた。不都合な真実を暴かれて怒る化学産業等からの激しい批判・中傷にも屈することなく、科学者としての誇りと信念を貫き通したその姿に感銘を受けた。(棚橋征一)
- ◆3月1日というのに、もう花見のシーズンです。と言っても、これは家の中の話ですが・・・。「桜切るバカ、梅切らぬバカ」と言いますが、一月ほど前に、家の近くで切り落とされた桜の枝を数本拾ってきて水に差しておいたのが、開花しました。回りが明るくなり、何か得をしたような気分になりました。(花咲かジイサン・水野隆)
- ◆NZのクライストチャーチの地震のショック。1965年まだ自由に海外へ渡航できない時代、政府派遣のユース・グッドウイル・ミッションとして11人でここで2泊ホームステイさせて頂き、(日本人が珍しがられた45年前のことで)大歓迎を受けました。今、悲しいニュースを見ながら、一方では、こんなにも多くの日本人が訪れていることにも深い感慨を覚えています。(高井光子)